



Title	＜書評＞Zachary M. Howlett, Meritocracy and Its Discontents : Anxiety and the National College Entrance Exam in China
Author(s)	新井, 凜子
Citation	共生学ジャーナル. 2023, 7, p. 269-276
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90823
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

Zachary M. Howlett

Meritocracy and Its Discontents: Anxiety and the National College Entrance Exam in China

Cornell University Press、2021 年 4 月、282 頁

新井 凜子*

1. はじめに

Meritocracy and Its Discontents: Anxiety and the National College Entrance Exam in China は、2021 年に出版された Zachary Howlett による中国の大学入試に注目したエスノグラフィーである。本書は人類学者である Howlett が 2011 年中より 2 年間にわたって実施したフィールドワークの集大成である。台湾海峡に面した中国福建省で、大都市厦門（アモイ）、著者がニンジョウ（Ningzhou）と呼ぶ人口 70 万人規模の中堅都市、農村部の 3 つの高校で英語教師として教鞭を執りながら、大学受験をめぐる高校生と家族、それを支える教師、さらには地方政府・役人のダイナミクスを描き出したエスノグラフィー研究となっている。

中国の大学入試、通称「高考（gaokao）」は、毎年 6 月に 2 日間実施される全国統一試験である⁽¹⁾。ほとんどの国公立大学が独自の二次試験を別途課す日本の大学入学共通テストと異なり、高考は実質その点数だけで目指す大学の合否が決まるため、しばしば 12 年間の初等・中等教育の後にやってくる「最後の決戦」（最后一战）と表される。

中国では、多くの人がこの高考を「メリトクラシーの礎石（the cornerstone of meritocracy）」と考えているという（第 1 章）。しかし一方で、教育格差と高考の不公平さは一般に広く議論されている。本書は高考がいかにメリトクラシーの「神話」を維持し、これにより社会構造とヘゲモニーが再生産されているか、人類学的・社会学的視座から明らかにしている。

本稿では、まず本書全体の内容を紹介したのち、イデオロギーとしてのメリトクラシーという論点に焦点を当ててより詳しく論じる。

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系博士後期課程；u632109k@ecs.osaka-u.ac.jp

2. 本書の内容

本書の本文はプロローグおよびエピローグの他に 6 つの章から成っている。各章のタイトルは以下の通りである。

Prologue: The Final Battle

1. A Fateful Rite of Passage: The Gaokao and the Myth of Meritocracy
2. Mobility, Time, and Value: The High Stakes of Examination and the Ideology of Developmentalism
3. Counterfeit Fairness: State Secrets and the False Confidence of Test Takers
4. Diligence versus Quality: Merit, Inequality, and Urban Hegemony
5. Courage under Fire: The Paradoxical Role of Head Teachers and the Individualizing Moment of Examination
6. Magic and Meritocracy: Popular-Religious Responses to Examination Anxiety

Epilogue: Lost and Confused

第1章では、高考を「運命を決める通過儀礼 (a fateful rite of passage)」と捉え、古代中国からの統一試験の歴史に触れながら中国社会におけるメリトクラシーと高考の役割を述べている。Howlett によれば、人々は高考を不平等な世界で比較的公平な競争であり、自らの運命を変えるチャンスだと考えている。中国においては *guanxi* (関係) と呼ばれる人間関係、つまりコネで多くの物事が決まる。そんな中で全国統一の試験は人々、特に農村部など恵まれない出自の人々に能力があれば運命を変える (改变命运的) ことができるという希望を与える。しかしこのメリトクラシーはおよそ「神話 (a myth)」にすぎず、高考で良い結果を出せるかは、家族の経済資本、文化資本、社会関係資本など、社会的要因が大きく関わっている。次節で詳しく論じるが、メリトクラシーというイデオロギーの下で、高考というイニシエーションによって個人が生み出され、さらにメリトクラシーの神話は強化される。

第2章では、なぜ人々が高考を重視するのかという問いをめぐって、中国

における開発主義（developmentalism）の歴史的・文化的土台をたどっている。近代化の中で都市化が進められ、特に農村部の人々にとって高考で高い点数をとっていい大学に行くことは、後れた（backward）農村からの脱却と都市への移住を意味する。さらに個人の発展が国家の発展と結びつき、開発主義のイデオロギーを強化している。

第3章は、ゴッフマンのドラマトゥルギーを引用しながら、高考の表舞台と裏舞台を描写している。表舞台、つまり人々の目に見える場では省レベルの地域間格差、民族間格差といった表の格差が存在する。一方で裏舞台では、表以上の格差が存在する。人々は「格差が存在している」ことを知っているからこそ、高考の相対的な公平性を肯定するが、実際には人々が思うよりも差は大きい。しかしその程度が表舞台から秘匿されることで、人々は大学受験競争に身を投じ続ける。

第4章は「努力」と「素質」という高考をめぐるってしばしば言及される要素について考察している。この文脈における「素質」の意味は中国の政治的・社会的背景が多分に関わっている。次節でより詳しく述べるが、「努力」はしばしば農村出自、そして女子に紐付けられる特徴であるのに対し、「素質」は都市部の成績優秀な生徒を表すときに使用されることが多い。「素質」を重視する高考は、「裕福で漢族かつ都市出身の男性 (rich, Han, urban male club)」のヘゲモニーを再生産している。

第5章は、教師の役割に注目し、教師たちの言動を中心に、教師、生徒、両親の関係性を描いている。生徒の高考の成績が自身の評価に直結する中国の教師は、勉強だけでなく、生徒の精神面、生活面にも介入し、定期的に家庭訪問を行うことで、勉強に集中できる「良い態度」を身につけさせる。この「良い態度」には点数は生徒の自己責任であるという考えも含まれる。高考への道のりは家族や教師をはじめ様々なアクターを巻き込んだ社会的相互作用（social reciprocity）によって形作られるが、「最後の決戦」の結果は生徒個人に帰される。

第6章は本書を特徴づける章であり、最も“人類学的”な章ともいえる。この章では、高考をめぐる人々の宗教的な行い（寺社参拝など）に着目している。非宗教・無神論が原則で、迷信の廃絶と科学の推進が使命とされている中国の公教育における、例えば教師が参加必須の行事として合格祈願の参拝に行くといった、表の政教分離と裏の信仰という構造を描いている。さ

らに、実力で決まるはずの高校の結果を大きく左右すると考えられている「運」とまじない・呪術 (magic)、占術 (fortune telling) との関わりや、日常会話に現れるユーモア・皮肉から、かれらの世界観 (cosmology) とメリトクラシーの神話が生み出す矛盾を紐解いている。

プロローグ+全 6 章にわたって高考を取り巻く様々な現象を分析したのち、エピローグでは大学入学後、決戦を乗り切った戦士たちが直面する茫然自失の状態 (迷茫) に触れ、メリトクラシーの今後の展望について言及している。

本書はエスノグラフィーを通じて非常に多彩なトピックを包含している。本書全体を通じて繰り返し出現するイデオロギーとしてのメリトクラシーについては次節で論じる。この他に、ジェンダーについては全体を通じて意識した書きぶりとなっているが、特に第 4 章で重要な焦点として扱われている。中国は公式に 56 の民族が暮らす社会であるが、民族間格差についても本書の至る所で言及があり、特に第 3 章では優遇政策⁽²⁾について触れている。さらに海外の大学へ進学する中国人の増加については、主に第 2 章で論じている。

3. メリトクラシーというイデオロギー

大学入試といった試験制度をブルデュー (1993) は「制定の儀礼 (*rite d'institution*)」と呼んだ。また、これまで中国の大学入試は「名誉のシステム (*a system of prestige*)」(Kipnis 2011) とも称され、教育を受けた者とそうでない者を選別し、より高い教育を達成した者をそうでない者より優れているとするシステムであると指摘されてきた。Howlett はさらに高考を「運命を決める通過儀礼 (*a fateful rite of passage*)」であるとして独自の議論を展開している。

Howlett によれば、高考は能力 (merit) によって個人を選抜するだけでなく、個人の能力への信心も生み出し、したがって試験が個人を形成している。高考とはまさに個人化の過程である。高考の結果は文化資本や社会環境に大いに影響されるが、その成功も失敗も要因は個人の能力に還元される。これを Howlett はメリトクラシーの神話と呼んでいる。高考は社会的労働

(social labor) を個人の能力に変換する装置なのである (第 1 章)。

この社会的不平等に気づいていながら、しかし、人々はそれでも運命を変える手段として高考に熱を注ぐ。Howlett は、むしろ人々はこのメリトクラシーの神話を実現し、強化しているという。言い換えれば、高考は個人の能力で人生の命運が決まるというイデオロギーを体現し、そして人々がその高考へ全力を注ぐことでさらに神話は強化される。

さらにこのイデオロギーは、開発主義という別のイデオロギーと結びつく。農村出身者や少数民族といった“後れた”人々は努力によって自らの能力を磨き、大学進学による都市部への移住を通じてモビリティを獲得する (第 2 章)。この個人の能力開発は国家の発展と結びつけられている。国民の「素質」をあげることによって国家全体の危機を救うというイデオロギー的政策がある。

中国語で「素質」とは、生まれ持った才能というような意味に加えて、「育ち」や「素養」のような、身につけ向上させることができるその人物の「質」というニュアンスを持つ単語である。例えば、道につばを吐く人は「素質が低い」、北京大学に合格した学生は「素質が高い」という具合である。英語ではしばしば“quality”と訳される。中国政府は、「質の高い」個人はより多くの収入、権力、社会的地位を手に入れることができるという言説とともに、教育によって国民一人一人の「素質」を向上させることで強い国を作り上げるという目標掲げる (Kipnis 2006)。

そんな中、入試のための教育 (应试教育) への批判の流れで 1990 年代から「素質教育」^③が推進されてきた。高考においても、受験生の「素質」、つまりこの文脈では思考力や社会实践につながる力を持った、高いモラルを身につけた人材を評価する方向へと改革が行われている。

しかし Howlett によれば、「素質」として評価される特徴は都市部の比較的经济的に恵まれた学生の方が身につけやすい。一方で、農村部などのあまり恵まれない出自の学生は、「努力」によってこれを克服できるとされる。しかし先述のように、高考の結果は文化資本を含む様々な社会的要因の影響を受ける。真面目で努力家であるだけでは「運命を変える」ことはできないのである。むしろこの「努力」のロジックによって社会の中のヒエラルキーが維持されている。

このイデオロギーと現実の乖離からくる不安をうめる役割が宗教や呪術

であり、そして生徒個人に目を向けてみると、これをやり過ごす方法が「麻木 (*mamu*)」になることだという。「麻木」とは、麻痺や無関心な状態を指す語である。Howlett は英語で “numb” と訳している。Howlett が調査した学校は成績によってクラス分けがなされており、限られた資源を効果的に配分するため、上のクラスと下のクラスではしばしば待遇に差がある。「努力しても報われない」と感じる下のクラスの学生は、シニカルにただ表面上の「良い態度」を保つ「麻木」な状態になるしかない。

これは高考の舞台裏で起きている資源競争の表象でもある。高校入試の進路指導の時点で、教師は学校の評価、ひいては自身の評価と、本人や家族の希望、家庭の経済状況などを加味して進学先を提示する。教師、そして地方政府の役人は、*guanxi* の働きの中で自らの管理する範囲内で生徒といった人的資源を最大限に得ることに集中する。しかしこの裏の調整が受験生や家族に直接伝えられることはない。この他にも、高考の点数や進学先といった統計データは表舞台から秘匿され、高考をめぐる教師や政府役人のヒエラルキーを上に行けば行くほど、そこで話されること、行われることの機密度も上がる。

誰がどの知識にアクセスすることができ、それを活用することができるのかということは、社会構造、そしてイデオロギーとしての文化によってコントロールされている (Keesing 1987)。格差があることは知りながらも、それがどの程度であるのか、自分自身がどれほど有利/不利なのかということも多くは受験生とその家族は知り得ない。これが高考は比較的公平な制度であるという信心を生み、メリトクラシーの神話を加速させる。同時に、持てる者のヘゲモニーは高考を通じて再生産され、持たざる者の失敗は本人の「努力」と「素質」不足として個人に還元され、社会に埋没する。

ところで、Howlett はこうした中国の人々の高考への信心と熱意を王朝時代に遡る歴史的背景、そして文化的背景から論じている。この点自体は示唆に富む内容となっている。また、他研究においても儒教的教育理念と受験競争の文化基盤について論じたものは見られる (Kipnis 2011; 丁 2021)。一方で、こうした歴史や文化から形成される価値観を共有しないと考えられる人々、つまり一部の少数民族は、高考というイデオロギーとしてのメリトクラシーを下支えする装置をどのように捉えているのだろうか。

中華人民共和国建国以降についても、自治区を持つようなモンゴル、チベ

ット、ウイグルといった少数民族をはじめ、一部の民族にはこれまで多数派である漢族とは異なる教育システムが存在してきた。初等・中等教育における民族学校に加えて、高等教育においても民族大学が設置されている。一方で、2000年代以降では、「言語や文化の差異が一定程度西部少数民族の青年が祖国の各地各産業における近代化事業への参与を阻害してきた」（馬 2019:12）として、主に西部の民族地区では、初等・中等教育のカリキュラム変更や学校の統廃合などの改編によって、漢族と少数民族を同じ教育システムの中に徐々に統合しようという流れが顕著である（Schluessel 2007; 李・王・陳 2019）。現在中国において少数民族自体が政治的に非常に敏感な話題となっており、研究の難しさが各所で指摘されているが、将来的には少数民族の高考の経験に焦点を当てた研究の可能性が考えられる。

4. おわりに

高考に関する統計データは、中国国内の研究者であっても入手が非常に困難である（これにより格差の実態は表舞台から隠匿されている）（第3章）。こうした中で、統計的分析ではなく、エスノグラフィー研究によって高考という全国規模のシステムから中国の社会構造を描き出そうという本書の試みは一読に値する。中国研究や人類学だけでなく、教育学やその他幅広い読者にとって示唆深い内容となっている。

さて、習近平政権下では教育改革がこれまでも行われてきたが、本書が刊行された後、2021年に通称「双減政策」⁽⁴⁾が施行された。この政策は、義務教育（小学校、中学校）における宿題の負担と、塾といった校外での学習による負担の2つを軽減することを目的としている。受験のための教育ではなく、より一層「素質教育」を充実させ、高考ありきの教育にメスを入れようという試みである（毛 2021）。この双減政策の流れの中で、高考がいかに変容するのか、あるいはしないのか、今後さらなる研究が求められる。

注

- (1) 高考の正式名称は「普通高等学校招生全国統一考試」である。「全国統一」という名称ではあるが、受験科目の選択方式や試験問題は地域によって多少異なる。
- (2) 高考では、Howlett のことばで「優遇政策 (preferential policies)」という、地元の学生が地元の大学により入学しやすいクオータ制と、少数民族といった特定の背景を持つ学生に加点する「積極政策 (positive policies)」がある。前者は北京や上海のような有名大学が集まる地域出身の学生が一流大学により入学しやすい状況を生み出し、後者は教育格差是正を目的として行われているが、加点対象とならない生徒や家族からの批判に晒されている。なお、一般的には後者を優遇政策と呼ぶことが多いため、本稿でも Howlett のいう「積極政策」を便宜上「優遇政策」としている。
- (3) この「素質教育」は、例えば愛国心教育が含まれるなど、政治・思想教育の役割も担っている。この点については Andrew Kipnis の著作 (例えば Kipnis 2006; 2011) が詳しい。
- (4) 正式名称は「关于进一步减轻义务教育阶段学生作业负担和校外培训负担的意见 (義務教育段階にある学生の宿題の負担軽減および課外学習の負担軽減のさらなる推進に関する意見)」である。学生の負担軽減だけでなく、塾のような民間資本、特に海外資本の教育市場への参入制限、さらに思想教育の強化が並行して行われている。

参考文献

- 丁 名揚 2021 「教育政策の変遷からみる中国の教育文化—擬似平等のなかの『選抜強化』型受験文化」『21世紀東アジア社会学』11:160-174。
- ブルデュー、ピエール 1993 『話すということ：言語的交換のエコノミー』稲賀 繁美訳、藤原書店。
- Keesing, Roger M. 1987. Anthropology as interpretive quest. *Current Anthropology*. 28(2):161-176.
- Kipnis, Andrew. 2006. Suzhi: a keyword approach. *China Quarterly*. 186:295-313.
- Kipnis, Andrew. 2011. *Governing Educational Desire: Culture, Politics, and Schooling in China*. Chicago: University of Chicago Press.
- Schluessel, Eric T. 2007. “Bilingual” education and discontent in Xinjiang. *Central Asian Survey*. 26(2):251-277.
- 李 祥・王 路路・陳 鳳. 2019. 我国民族教育政策变迁的脉络、特征与展望：基于《教育部工作要点》的文本研究. 民族教育研究, 1(30):19-29.
- 馬 戎. 2019. 学校教育是少数民族走向现代化和共同繁荣的桥梁. 民族教育研究, 2(30):5-12.
- 毛 振明. 2021. 领会“双减”深刻意涵 助力学校体育改革. 上海体育学院学报, 45(11):4-6.